

保育者養成における「表現・音楽」の授業

荒 木 紫 乃

鶴見大学短期大学部

1、はじめに

未分化な子どもの表現が成長とともにしだいに大人の表現形式の一つである音楽を幼児の表現に組み込む過程は非常に重要である。音楽教育は子どもの表現を豊かにする役割をもっていなければならない。

〔幼稚園教育要領改訂の示すこと〕

平成元年に幼稚園教育要領が告示され、領域「表現」が登場した。その当時の行き過ぎた技術偏重に対する批判が込められたのではないかと推測されるが、それまでの音楽教育が表現教育として機能してこなかったことが批判の一因になってはいないだろうか。

平成10年に告示された教育要領の改訂では、領域「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い・・・」と示され、ねらいの(2)では「自分なりに表現して楽しむ」、内容の取り扱いの(2)では「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしいさまざまな表現を楽しむことができるようにする」と記述されている。

これらのことから、その子どもがその時「自分なりに」できる表現の現実の姿を保育者が受け止め育てることが大切である。子ども側の発想だけでなく、外側に表そうとする能力も含めて大切であるという表現教育の実践の観点が明確に示されたといえる。

そこで保育者養成機関の音楽に関係した授業では、どのような内容でどのように展開をすればよいのか、表現教育として本当に機能するためにはどのようなことを学生に伝えればよいのか分析・考察するのは意味があると考えた。

2、研究の方法

保育内容「音楽リズム」を受講した後、学生が記述したレポートの内容を分析・考察し、今後の授業のながかりについて考察する。

対象者：福祉系大学の4年生17名（女子11名、男子6名）（本校では、3年時に保育内容「表現」を既に受講済み）

期間：平成12年12月の3日間の集中講義

レポート課題：「子どもの音楽教育について大切だと思うキーワードを3つあげてその理由を書いて下さい」

授業展開の軸を以下の3つにした。

I、子どもの現実の姿（うたう、おどる、まねる、つくる等）に表現の芽を捉える

大人の洗練された文化としての音楽表現でなくその子どもが実際にうたう、たたく、えがくなど現実子どもが見せる姿の中で子どもの表現を捉える

II、子どもの表現を素材（動き、音、形等）との関係で捉える

子どもが表現の素材とするのはどのようなモノやコトであるのか。大人の既成概念と異なる場合もあること。子どもの自由な発想と構成を発見する。

III、学生が表現作品を作る

表現の自由さ豊かさをめざして学生自身が作品を作る。

3、結果と考察

レポート分析の視点

①学生が「子どもの音楽表現」について何を重要な視点としてあげているか

②視点とした根拠は何か、理由を探ってみる
学生がキーワード（視点）としてあげたのは以下の通りである。

- 1、顔の表情、できるよ、自由な発想
- 2、曲、動き、なりきり度
- 3、環境、楽しむ、生活
- 4、生活、自主性、知識
- 5、子どもがリズムを楽しむ、みんなと一緒に楽しむ、保育者自身が楽しい
- 6、自由、その子らしさ、楽しむ
- 7、生活、スキンシップの中で生まれるリズム、聞く
- 8、音楽は楽しい、リズム、体を動かす
- 9、保育者が楽しむ、考えすぎない、繰り返す
- 10、音の強弱、緩急のリズム、視覚と音楽
- 11、感じる、みじか、楽しむ
- 12、楽しむ、打楽器、音を作る
- 13、楽しむ、みじかに感じる、イメージを大切にすること
- 14、生活の中の音楽、楽しむ、大人と一緒に楽しむ
- 15、保育の感性、子どもの主体性、楽しい
- 16、楽しむ、日常に取り入れる、子どもと一緒に楽しむ
- 17、主体性、自由性、社会性、

視点とした根拠のうち多いものを以下まとめた（詳細は当日発表）

○子どもが楽しむ

「森のくまさんやむすんでひらいて等、数を上げたらきりがなくらい歌っている。そして、季節に合わせた歌等も織りまぜながら、約1時間ぐらいつとみんな歌っている。その様子を見ているとすぐ子ども達は楽しそうに歌っていて、・・・」の意見に代表されるように「子どもが楽しむ」という姿が認められることが重要であるとしている。

○保育者が楽しむ

「私自身、歌を楽しんでみようと思い、そのような姿勢で歌に触れてみた。子どもたちと一緒に楽しむことが大切なんだと気付くことができた。音楽を子どもに楽しんでもらうためには自分も楽しむことが大切なんだと思う。そして音楽に触れて自分がたのしいと思い、子ども達も楽しいと思ってくれることが大切なんだと思う」「体調が悪くてやや不機嫌な私に子ども達は近づいてこなかった。」の記述に見られるように、保育者自身が楽しんでいる姿が重要である。

○子どもどうして楽しむ

「慎吾ママは意外と難しく、子どももちゃんとした振り付け通りにはできませんが、キャーキャーといながらリズムに乗って体を動かしてとても楽しそうでした」の記述に見られるようにみんな一緒にというように複数の子ども達が一緒に表現を楽しむ姿が重要であるとしている。

○子どもと保育者が楽しむ

「子ども達の方から先生にこれ歌ってなど、保育者も子どもと一緒に歌うことが楽しい」「子ども達と一緒に折り紙をしていた。風船を作っていたのだから私が何気なく、シャボン玉の歌を口ずさんだら、子ども達も自然に私に合わせながら歌いだした。」「子ども達の心に合う歌を歌うことで、子ども達と共有できるものがあるのだと感じられた」「リズムやフレーズをつけて子どもに話しかけることで、そこからリズム感が養われる」の記述に見られるように子どもと保育者の交流が重要であるとしている。

4、まとめと今後の課題

養成校での授業への手掛かりとして以下のことが考えられるのではないかと。

○楽しいということ

学生のレポートに記述された内容は、実際に授業を受けて書いたものである。個々の学生があげたキーワードは種々であった。学生の感性というフィルターを

通すと同じ授業内容を経験しても、学生個々の受け止め方が異なるということの現れと考える。しかし、子どもの音楽表現を育てる上で重要なキーワードとなる根拠について、大半の学生が「楽しいということが大切だから」という内容の記述をしていた。そして楽しいと考えるきっかけになったのは、授業で学生自身が実感した楽しいという感情を味わう経験であった。例えば、「この授業を楽しんだのは、先生の表情だったと思う。くるくると変わり、からだいっぱいで楽しもうね！と表現している先生を見ていたら、だんだん楽しくなっていた。リズムがとれなくても落ち込まないで、笑ってできないよ！と言えた。」はこのことを語っている。授業の内容だけでなく、担当教師（筆者）の表情や学生との対応や身振りも含めて学生は受け止めている。

これらのことから、学生自身が楽しいと感じる経験が授業の中で必要であり、それらの経験をふまえて子どもの姿に楽しいということに対して価値を認めていると考えられる。

○音楽を共有する

授業を進めていく上で筆者が強く感じたのは、学生と筆者で音楽を作り上げていく時、同じ音楽を共有して心の交流ができるということである。こちらが一方的に何かを指導するというような場合には生じない感情である。学生が楽しいという時は筆者も楽しんでいることを強く感じた。音（楽）でコミュニケーションするというのは本来こういう状況なのではないだろうか。

○子どもの指導方法につながっていくこと

音楽の何が楽しさの要因になっているかということを経験が学生が自覚することである。「人が演じていく行為はリズムにつながっているし、話し言葉やもの音などは音に関することに・・・自分達の話しに合わせてリズムを作るので必然的に音楽を想像していく事につながるし、その結果音楽表現を育てることにつながると思う」に見られるように、学生が指導の方法を自分の中で理論化できることが大切である。

以上今後の課題として、楽しい経験だけでよいのだろうか。人は表現する時いつも楽しいのだろうか。教育要領の領域「表現」の中で、楽しいという記述が多数見られるが、子どもの表現を豊かに育てる上で、楽しいということがどのような意味をそこでもってくるのだろうか課題にしたい。